

語り合う文学教育の会

2013年度 No.3 5月7日・文責 橋本博孝

今、学校で -----	2
物語の授業をつくる -----	5
これからの予定 -----	8

奈良例会は8名でスタート！

奈良サ連協の分科会の一つとして行いました。初めての方もふくめ8名の参加でした。わたし（橋本）が物語の授業をつくっていく上で大切にしたいことを述べました。物語を読む時、子どもたちの中でどのようなことが起こっているのか、わたしの一番の課題意識から話しましたが、どうも抽象的になってしまった（その上わたし自身が現在進行形で考えていることなので少しもまとまっていない）と反省しています。大まかな内容は5ページ以降をご覧ください。

会費を納入された方は5月5日で63名

三重31名 奈良17名 全国15名

会員のみなさん。例会や集会に顔を見せてください。それからお忙しいでしょうが、機関誌11号とこの会報を読んでください。そして、ご意見感想をよろしく。また、職場のことや毎日の授業のことも知らせてください。メールでもいいですよ。この会報が会員のみなさんの交流の場になればうれしいです。

三重と奈良と全国の学校で…

奈良でも三重でも、実践報告や学習会の前にそれぞれの職場のことを話し合っていま

す。職場ごとの個別の課題は当然ありますが、それらの共通の土台に三つのことがあるように思えてきました。

一つは、個別の教育的な配慮が必要な子どもの増加です。

体験的に言うと、一割以上の児童に発達のもつれやつまずきが見られるように思います。町の学校も、海辺の学校も、農村部の学校も同じようにこの課題が現れているのは、単なる環境の問題ではないことを示しています。保護者の責任にして、問題を家庭内に封じ込めておくことも論外です。

直接苦勞されるのは、保護者と担任の先生です。

個人の教員がどんなに力量を持っていても、担任任せにはならないというのが、たくさんの仲間たちが流した汗と涙から得た教訓です。

専門の先生が担当されている学級への通級の指導ができればぜひ、できなければせめて補助教員を。

とにかく一人の教員と一つの学級に責めを帰さないことです。将来は、きっとその子の必要にもっと応じた教育内容と方法が編み出されるはずですが、しかし、教育行政がそれを実現するまでには長い年月がかかるでしょう。それまでは、こういう言い方をすると誤解を受けるかもしれませんが、子どもたちも教員も消耗しない方策を考えましょう。

次は、ある学校の話として具体的に言います。

これまでもざわざわと少しも静かにならない子どもたちでした。今年の始業式、校長は体育館の舞台の上で演壇を叩いて「静かにしなさい」と怒鳴りました。校長が頭ごなしに怒りだせば、さすがに表面的にはいくらか静かになります。

その後の全校集会では、静かにすることときちんと整列することとが自己目的化されていきます。気をつけ、礼、休め、の練習ばかりです。その先頭に立っているのが、新任教員なのです（この学校は新任の先生の数が多いのです）。

校長やベテランと言われる先生、また初任者指導員たちは、「君のクラスは静かになったね」と評価します。この学校では、きょうも教室や廊下で若い先生たちの「静かにしなさい」と注意する声ばかりが響いています。

これは恐ろしいことですが実話です。管理は、目に見える形で始まり、内面の統制で終わります。それが目的ですからね。

わたしがこの話を持ち出すと、また飛躍して、とよく言われるのですが、日本の学校教育は明治の創設以来ずっと兵士養成という側面を持たされてきました。「修身」は目に見えやすいですが、今日まで清算も総括もきちんとされずに続いてきたのが、実は体育の授業ではないかと思います。ラジオ体操は整列しなくてもできるのに、なぜ長方形の隊列をとらせるのでしょうか。後ろを向くのはどっちからでもいいのになぜ「回れ右」なのでしょうか。

みなさん、映画をご覧になりますか。わたしはそんなにたびたび見ないので見た映画をよく覚えています。黒澤明の「夢」の戦後の場面、山田洋次の「隠し剣・鬼の爪」の足軽に近代歩兵術を教える場面などは機会があればぜひ見てください。号令一下糸乱れず行動することが、いかに醜怪なものかがよくわかります。

それはともかく、若い先生たち、とりわけ新任の方がそういうことにならされていくことをわたしは恐れます。

同僚性は職場の和を守る方向で働きます。教員がバラバラだったら学校は殺伐としてきますから、それは当然です。とりわけ、新任の先生は学校現場をいくつも知っているわけではないから、その狭い意味での同僚性（本当はこうは呼ばないでしょうが）に批判的なまなざしを持つことは難しいでしょう。

でも、日本中の教員との同僚性を追求しようと発想してください。いろんな集会に出かけましょう。語り合う会をはじめサークルに加わりましょう。子どもたちを従わせるのが教育ではないのだ、怒鳴るよりも子どもたちとの人間的信頼を築きたい、と若い先生たちも本当は思っています。実践でその方向を示すのが、わたしたちの願いです。

おしまい、子どもをとりまく文化の貧しさです。

これは子どもたちの発達環境の大きな問題です。知的な好奇心を引き出す豊かさが、子どもたちの周りの文化にあるのでしょうか。子どもたちだけではなく、わたしたちだっ

てそうだと思います。テレビはいつから出演者が笑ってばかりいるバラエティ番組だけになったのでしょうか。本屋にはコミック本ばかりが並んでいるし、週刊誌はポルノ雑誌まがいです。電車の中では老いも若きも幼きもみんなスマートフォンをいじっています。

ある学校の社会見学旅行の話です。子どもたちはバスに乗った途端、カーテンを閉めて車内ゲームに熱中するのだそうです。たまに車窓に目をやると、イオンモールを見つけ「行きたい」と叫ぶだけ。これはどこも同じだなと半ばあきらめて聞きましたが、中国からの留学生が「日本に来るまで栗にイガがあることを知らなかった」（もう一つ、お茶の木も見たことがない）と言ったのには、さすがに驚きました。自然（土）と生産から切り離された文化環境にあるのは日本だけではないようです。

わたしたちはみんな商業的な文化の一方的な受け手にされてしまっているのではないのでしょうか。担い手として、もっと能動的にかかわりたいと思います。

保護者の多忙さ、経済的な要因もあります。本物の文化をつくりだそうと思えば、時間も手間も、場合によってはお金もかかります。しかし、根本の理由はもっと構造的なところにあると思えます。

こんな事例を目の当たりにすると、子どもたちは、現代社会に生きるものとして社会そのものが持つ矛盾のしわ寄せを直接受けるだけでなく、その社会矛盾の上にある学校教育がはらむ矛盾の中にも投げ込まれる、さらには社会矛盾を集約化した家庭の矛盾の中でも苦しむ、という、確か小川太郎だったと思いますが、その指摘をあらためて感じます。

教員を競わせることは、子どもたちを競わせること。子どもたちを競わせることは、教室を荒れ地にすること。

教員をしばることは、子どもたちをしばること。子どもたちをしばることは、国の未来を閉ざすこと。

これは、2012年11月23日の第50回東海近畿教育サークル合同研究集会であげた集會決議の一節です。教育に一番似つかわしくないのは、結果競走と管理だと思います。

この決議はそれを表そうとしたものです。この時点では日本維新の会の教育政策に対する批判を前に出していましたが、安倍政権の発足後、これは現在の教育政策に対するものになりました。学力調査は全国一斉でなされました。中教審答申も行政による管理を強める方向を示しました。

わたしたち実践者は、何をめざせばいいのか。

授業と学級を公共的な空間にすること、教育の土台に公共性をすえること、漢語で書くことやこしいようですが、子どもたちみんなが授業をつくること、子ども地域みんなの学校にしていくことだと思います。

物語の授業をつくる

奈良例会で述べたことをふりかえりつつ、わたし(橋本)の考えをまとめました。が、はじめにも言ったようにわたしにもよく分かっていないところがあります。だから、こーやってまとめてもしどろもどろです。聞いてくださった方はさぞわかりにくかったことと思います。すみません。

わたしたちも子どもたちも読むのは活字です。けれど、頭の中に浮かぶのは活字ではなく、その活字があらわしていることばの具体的な象(かたち)でしょう。物語の読みの授業では、活字から場面を具体的な象として結ぶことが出発点です。このことをはじめに考えます。

一枚のふとん

この活字からどんなふとんがうかびますか。

人によって当然バラバラでしょうが、「ふとん」という言葉からは、あったかいふっくらしたイメージが感じられます。ところが「一枚」という数え方は、お皿や紙や葉っぱなど薄い平面上の物に共通する数え方です。これらが交差するので「一枚のふとん」は王侯貴族の羽根布団にはなりきれません。

言葉固有の意味は、けっこう深いところで働いていると思います。

病人には一枚のふとんがかけられていた。

となると、「病人」「かけられていた」がひびいてきて、一層ふっくらしたふとんではなくなってきました。

遺体にはふとんが一枚かけられているだけだった。

となると「遺体」「だけだった」が働いて、ふとんはいよいよ薄っぺらなみすぼらしいものになってきませんか。

このように言葉固有の意味は重なり合って文脈をかたちづくることで、読み手が描く象をしだいにくっきりしたものにしていきます。つまり、そのことがどのように描かれているかを見ることが、物語の場면을臨場感を持って立ち上げていく上での大前提だと思えます。

「くじらぐも」(光村1年下)で具体的に考えます。このお話では「～すると～」という語られ方がたくさん出てきます。このことは『語り合う文学教育』11号に藤原先生が「描写を読むための基礎力」としてくわしく書かれているように、二つのできごとの連続性(～すると、すぐに～)がうかんできます。11号の2ページからを読んでください。

また、子どもたちが雲のくじらにとびのった所には「あおい あおい 空の なかを…すすんで いきました」という語り方があります。また「空は、どこまでも どこまでも つづきます」とも語られています。

この「あおい」と「どこまでも」のくりかえしから、読み手にはどんな場面のようなが生まれるでしょうか。青い空に届いてもまだその先に青い空がある、どこまで行ってもまだその向こうがある。くじらぐもの動きが感じられます。これは、ある学校の校内研修で田木さんが述べられたことです。

つまり、このことば(他にもあります)に注目することで、この場面は動画として読み手の子どもたちの中に生まれるのです。

「くじらに乗った子どもたちには何が見えたかな」

と問いかけて、「砂浜」「田んぼ」という答えを引き出す授業が見られます。それでは静

止画のまま終わる可能性があります。もう一步踏み込んで

「田んぼがどんなふうに見えたの」

と聞きたいところです。そうすると、小さく見えていた田んぼがだんだん大きくなって、真下に見えてきた。まただんだん小さくなっていく…という場面を共有することができます。

ところで、藤原先生のご指摘の「～すると～」に気づくと、「すぐに」というすばやさとともに、「すると」前後の二つのできごとにはつながりがあることが分かります。そこから「くじら」の行動はいつも「も」で表されていることが見えてきます。「子ども（先生）が～すると、くじらも～します」という構文です。

ところが、やがて「くじら**が**」という語り方が出てきます。くじらと子どもたちとの関係がはっきり変わるのです。そして「くじら**は**」という語り方に進んでいきます。この違いは、辰野さんのクラスで子どもたちが見つけたそうです。

くじらの行動を表す時の、助詞「も」から「が」そして「は」。この変化の意味を考へることは、登場人物や出来事について考えることから一步踏み込んだ次元になります。そのように語られていることの意味に入るからです。

まとめます。言葉固有の意味は、子どもたちが（わたしたちも）活字文章群から物語の場面をむすぶときの深層で働きます。それは、その物語の文脈によって輪郭を鮮明にしていきます。そして、そのように語られていることの意味を考えさせる方向に進みます。登場人物とできごとを対象とする読みから、語りそのものを対象とするところに踏みこみます。

ところで、文脈と言ひ、語りと言つても、それらは活字文章群の側に客観的にあるものではありません。すべて読み手が見出すものです。授業でいうと、子どもたちは教員の解釈を受け取るのではなく、自分で文脈（筋）を見い出していくことになります。小学校でどの程度という課題を棚上げして言うと、最終的にはそのような文脈、語りを見い出した自分を見い出すことにつながるのだと思います。

これからの予定

- ☆5月11日（土）奈良例会 午後2時半～奈良教育大学附属小学校
報告・入澤佳菜さん 新しいクラスと「すみれとあり（2上）」の授業
- ★5月12日（日）日文協国語教育部会5月拡大例会公開シンポジウム
午後1時～ 拓殖大学（文京キャンパス）国際教育会館3階F301
文学教材の「学習の手引き」とこれからの国語教育の課題 —「ごんぎつね」「故郷」「羅生門」などを切り口として— 詳しくは橋本まで。
- ☆5月25日（土）三重例会 午後2時30分～三重大学教育学部1号館4階
報告・原田聡子さん 「初雪のふる日（4下）」の授業
- ★6月2日（日）午後1時～ 三重民教連合同集会 アスト津
算数や他教科の話も同時に聞けます。そのほかにも、毎日のとりくみで困っていること、課題だと思っていることにきっと方向が見い出せるはずです。
- ☆6月22日（土）三重例会 午後2時半～ 三重大学教育学部1号館4階
中西祐司さんの実践報告「鳥獣戯画を読む」（予定）
- ☆7月 6日（土）三重例会（予定）
- ★8月10日（土）・11日（日）日本文学協会国語教育部会夏期研究集会
法政大学市ヶ谷キャンパス（東京） 〈第三項〉と〈語り〉
中西祐司さんが実践報告「生きる」をします。 詳しくは橋本まで。
- ☆8月17日（土）18日（日）語り合う会夏期合宿
三重志摩市阿児アリーナ 今から予定しておいてくださいね